

課題研究報告要旨「異界に生きる少年・少女」

都市病理空間を生きる少年・少女

科学警察研究所 清水賢二

はじめに

東京都A区A町の平凡な戸建て住宅の二階に女子高生（当時17才）を監禁し、殺害の後、ドラム缶詰にして死体を遺棄していた少年たち4人の存在が明かとなったのは1989（平成元年）4月のことであった。

裁判の結果、一応の判決は出た。しかし、少年たちを駆り立てたものは何であったのか、少年たちの行動の深部に何が巣くっていたのかは、裁判の過程でも明かとなってこなかった。恐らく、少年たち自身にも、「大変なことをした」という結果に対する思いは生じたとしても、自身の何がそのような行動へ仕向けたのかは掴み切れていないのではないかと見られる。

目的

本報告においては、この「ドラム缶詰少女監禁殺害事件」（以下、「事件」）を題材に、事件が成立って行った経過を追ひ、それを再現しながら、事件に関わった少年たちの日常生活世界の深部に広がる「病の異界」の諸相と、その成立、広がり、将来等について報告する。

さらに、この報告作業を通し、こうした逸脱少年たちに認められる「病の異界」が、決して特異なものでなく、今日の多くの少年たちの日常生活の中に存在するものであること、その世界の形成に少年を囲む現代社会の「個化とモノ化」に支配された場の歪みのあることが検討される。

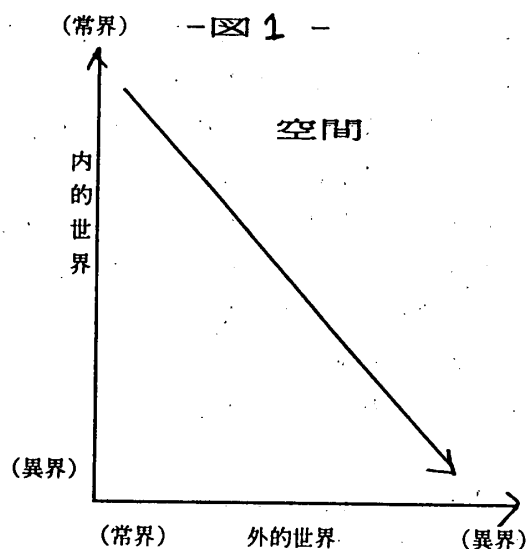
使用資料

法廷記録。具体的には、事件審理のため法廷に立った事件参加少年たちへの質問と、それへの供応。

分析軸

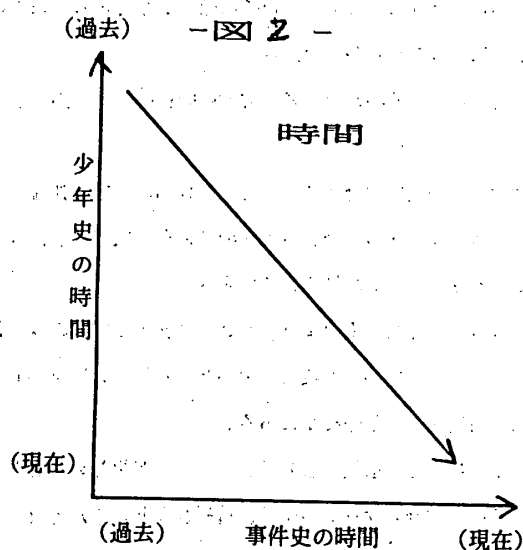
（1）空間軸：

少年世界を、正常な世界である「常界」と「異界」、少年を包む全体社会である「外的世界」と少年の所属する集団である「内的世界」とに分け、これらの関係性がどのような特徴を持って「異界に生きる少年たち」を位置付けているかを読み解く（図1）。



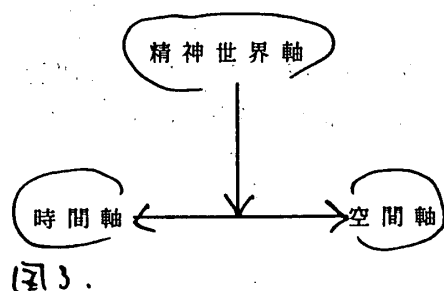
(2) 時間軸：

少年の生きた時間を、少年が所属する社会が育んできた少年史「現在」と「過去」、少年が犯した事件経過の「現在」と「過去」とに分け、これらの関係性がどのような特徴を持って「異界に生きる少年たち」を位置付けているかを読み解く(図2)。



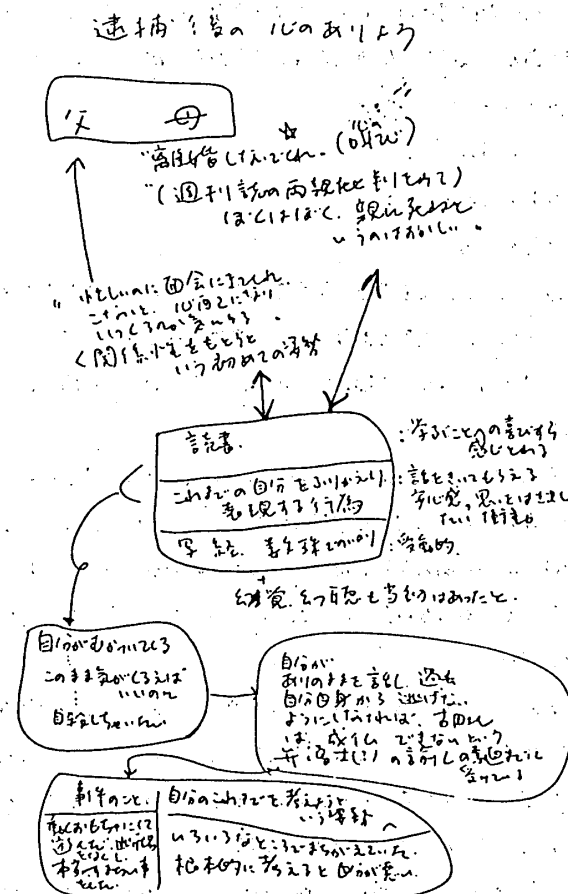
(3) 精神世界の軸：

上記の(1)(2)の軸を支配する第3の軸として、少年の精神世界における「モノ化(無気化)」と「個化」が(1)(2)の軸にどの様に絡まりあって「異界に生きる少年たち」を位置付けているかを読み解く(図3)。



結びに

少年たちは、逮捕後の裁判の過程で、自分たちの行為について、図4に示すような述懐を行っていた。



明かとなったことは、以下の様なことである。

- (1) 早い時期からの緊張に満ちた親子関係・夫婦関係と、それが子供の自我形成に及ぼす深いトラウマ
- (2) 学校社会での早い時期からの「落ちこぼれ」現象の始り、とその緊張をカバーする非行集団
- (3) 上記の過程の進行に伴って、全てを「モノ化」する視線と、自閉的な「個化」の性向の成立
- (4) しかし、こうした特徴は、彼らだけの特徴でなく、多くの青少年に見られる今日的状況である